

厳罰化だけで犠牲者はゼロにならない。 だれもが命の重さを心に 刻んでほしい。

井上保孝さん郁美さん夫妻



井上保孝さん(57歳)郁美さん(39歳)夫妻。今年10月23日に誕生した次子ちゃんには、亡くなった2人の姉のほか、典子ちゃん、晋くん、森くんの兄弟がいます。

平成11年11月28日、箱根での家族旅行の帰り道、千葉の自宅を目指す井上さん家族の車は、東名高速で凶器と化した蛇行運転の大型トラックに追突されました。そのまま50秒ほど押され、前の車に衝突して停車した直ぐ、すでに車体は炎に包まれていました。
「後ろで眠っていた長女・妻子(3歳)と次女・周子(1歳)は、逃げるのができずに焼死しました。『あちゅい』という言葉を残して…。助手席にいたわたしは背中と左腕に重度の火傷を負い、その後も植皮手術のために入院を繰り返しています」と夫の保孝さん。運転していた当時55歳のトラック運転手は、前日にウイスキー1瓶の約6割をブレイの中心

2人の娘が目の前で焼死…。8年前の悲惨な事故後、署名活動を展開し刑法改正を求めた井上さん夫妻にその道のりと想いをお聞きしました。

で薬酒として飲み、当日、東名高速のサービスエリアで缶酎ハイ1缶と瓶に残っていた約4割のウイスキーをストリートで飲み干してしました。約1時間の仮眠だけでハンドルを握り、3車線をまたぎながら約40kmを蛇行。その間、周りのドライバーが通報しましたが、暴走したまま、井上さんの車に追突して止まりました。妻・郁美さんは言います。「運転するわたし以外の3人は、旅の疲れで眠っていました。追突の衝撃で飛び起きました。『ワアツ』という声をあげて、何が起きたのかわからないでも本能的に『逃げなきゃ』と思いました。ドアは開かず、偶然パワーウィンドウの窓が開いたので、わたしだけが奇跡的に脱出できました。すぐ娘たちを助けました。もしが後3分のドアは炎に包まれていました。もしあの時、窓が開かなかったら、妊娠8か月だったわたしのお腹の小さな命も、家族全員の命が、そこで終わっていたと思います」。

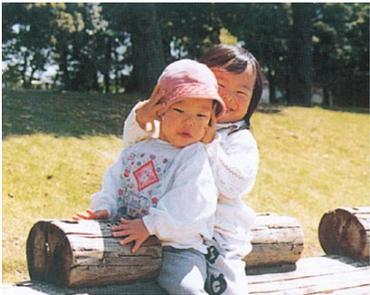


この事故で車内の大半が焼けましたが、次女・周子ちゃんのチャイルドシートのバックルが、シートベルトをつけたままの状態焼け残っていました。郁美さんは訴えます。「周子は、最後までシートベルトをしていました。世の中すべての親は、誕生した我が子を手にした時から、何とかその小さな命を守ろうと、事故に遭わないように、様々なルールを教えます。子どもは大人たちから教わったルールを守ろうとしています。ルールを守れなかったのは、34年間も大型トラックを運転していたプロのドライバーのほうでした」。

「あちゅい」という言葉を残して…。
奏子と周子は炎に包まれました。

二人の命日に成立した刑法改正案。

加害者は「業務上過失致死傷罪」と、道路交通法違反(酒酔い運転)の罪で検察庁に送致されました。検察庁は起訴し、懲役5年を求刑しますが、東京地方裁判所で懲役4年と生かされたのであろうという娘の命の重さが懲役4年。わたしははがくぜんとしました。控訴も棄却されてしまいました。夫・保孝さんは、刑事裁判を通じて大きな疑問を抱きます。「わたしたちから見れば、殺人と何ら変わりませんが、殺人罪なら無期懲役や死刑もありませぬ。しかし、業務上過失致死傷罪は、人を何人あやめても最高刑が懲役5年。しかも、加害者は常習の飲酒運転手なのに、不注意で人をあやめてしまったという業務上過失致死傷罪が適用されてしまう。保孝さん・郁美さんは、事故後、同じ想いの遺族と、業務上過失



ゴールデンウィークに近くの公園で仲良く遊ぶ、奏子ちゃんと周子ちゃん。2人ともピアノが大好きでお母が上手な姉妹でした。

致死傷罪」の法定刑見直しを求める署名活動を展開します。法務大臣に提出した署名数は37万4千を超えました。その結果、平成13年11月28日の国会で「危険運転致死傷罪」の新設を含む刑法改正案が成立、くしくもこの日は、妻子ちゃんと周子ちゃんの命日でした。この法改正で、悪質危険な行為で事故を起こし、人を殺傷した場合は、過失犯ではなく故意犯として扱われ、死亡させた場合は懲役15年、人を傷つけた場合は懲役10年と厳罰化されます。平成17年からは、それぞれの最高刑の懲役が、5年間延長されました。しかし、保孝さんは指摘します。「法律が抑止力となるよう見守ってください。新たな課題が生まれてきます。飲酒運転の死亡事故は減っていますが、一方で法律施行前と5年後とで、ひき逃げが4割も増加しています。アルコールが抜けてから自首する『飲酒ひき逃げ』や、事故後に飲んだ」と言い逃れる『重ね飲み』など、悪質な逃げ得が発生しています。今年9月に、教習業務違反(ひき逃げ)は懲役10年以下、罰金は百万円以下に引き上げられました。また法律の抜け穴がふさぎされていらない。そして、法律がいくら厳罰化されても犠牲者は決してゼロにはなりません。さらに命の大切さを訴えなければと思っています。郁美さんも命の重さを伝える活動を全国で展開しています。法の改正も本当に大切ですが、それ以上に、命の重さを伝えなければなりません。わたしたちは少しでもそれをわかっていたらいい。全国各地で、生命のメッセ



奏子ちゃん周子ちゃんの等身大パネルで「生命のメッセージ展」について説明する井上郁美さん。足下には二人が生きていた証ともいえる小さな靴がならべられていました。

ージ展」を開いています。犯罪や交通事故件数は数字で扱われる面が多いですが、そうではなく、ひとつひとつの命がどれだけ重いかということを読んでも受け止めなければならぬと思うのです。命を奪う事故がゼロにならない限り、減ったと喜ぶことはできません。「もうこれ以上、同じような被害者を出して欲しくない」と活動している保孝さんはいまだ、毎日のように伝えられる飲酒事故の報道が、何よりもつらいと言います。「わたしたちは、あの日以来、もう二度と以前と同じ生活に戻ることができません。子ども2人を目の前で失った喪失感…。体の傷はお見せでき

ますが、負ってしまった心の傷はどなたにもお見せできません。わたしたちは、この傷を一生背負っていくかなければならないのです。何の罪も無い子どもたちが、ルールを守らない大人の犠牲になり、輝かしい未来を断ち切られてしまう…。このまっとうなことは絶対にあってはなりません。人の命は奪っても奪われてもいけないのです。そういう世の中を変えていくのはわたしたち大人の責任だと思っています」。飲酒運転撲滅と命の尊厳を守る井上さん夫妻の活動は、天国の奏子ちゃんと周子ちゃんに見守られながら、犠牲者がゼロになるその日を夢見て、今日も続いています。

命は奪っても奪われてもいけない。